

# 図書館だより

Library News No.69

Nara National College of Technology

2012年2月 奈良工業高等専門学校図書館発行



表紙絵は、1S 北林佳祐君（左上）、1M 谷利将太君（左下）、1S 栗田一佳君（右下）の作品  
右上は、秋の読書週間の展示：今年のテーマは「原子力に関する本」

## 目次

巻頭言 「構えない読書のススメ」	2
多読表彰	3
読書感想文コンクールを終えて	4
読書感想文入賞作品	6
ブックハンティング	13
学生図書委員会活動報告ほか	14
読書週間行事・アンケート集計	16

# 構えない読書のススメ

電子制御工学科主任 島岡 三義

大学での「国語」の課題は指定された図書を読み、印象に残った文章をノートに書き取るものであった。ノートを埋めることが目的になっていたので、筋書きの面白さを感じている余裕がなかったし、ノートに書き取る習慣も身に付かなかったから、教員の意図を全く理解していなかったかも知れない。このような目的がある「構えた読書」というのはきついものであるが、半分は強制的でも、たくさんの本を読んだお陰で本を読むことの面白さを感じられるようになったから、構えた読書も無駄ではなかったと今になって思います（自己矛盾）。

歴史解説・評論書、時代小説、ちょっととぼけた娯楽本、四コマ漫画が愛読のジャンルです。本を読む時間を作れた時が至福であり、そんな時は構えた読書などは決してしません。四コマ漫画は四コマ目の落ちで笑えれば私の精神状態は「健全」という健康診断にもなっています。数学者の故森毅京大名誉教授の著書「魔術から数学へ」の中で、「弁護士、教師、代議士、医師など下に「シ」のつく職業人がいるが、「士」と「師」の違いは何かの問いに、騙されたいと思う人を騙すのが「師」で、騙されたくないと思う人まで騙すのが「士」だと、卓抜な学説を唱えたやつがおった」の一節がありました。「士」と「師」の違いを真剣に考えたことはなかったし、国語の先生に訊いたこともありませんでしたが、この学説（本当かどうかは別として）になるほど納得したものでした。言われてみれば、弁護士にかかったら「黒」いものでも「白」と言いくるめられそうな気がするし、一方、我々教員は教師として純朴な学生を騙しつつ、難解な専門知識を授けているということでしょうか？学生は騙されても良いから教師に知識を授けてもらいたいと思っているのでしょうか？ともあれ、想定外のことにいくわし、得した気分が味わえるのも構えない読書の良いところでしょう。また、書名は忘れましたが、働きアリの二割は実のところ真面目に働いてなくて、真面目な八割を抽出してみると、その内の二割がまた働かなくなるという記述にいくわし、優秀な人ばかり（のはず）の集団においても、優秀ではない人が必ず現れてくる人間社会にも通じることだと妙に感心したものでした。その本が何だったかを思い出すためにネット検索していたら、働かない二割のアリは、真面目なアリの予備軍であり、重要な存在であるという指摘にいくわしました。この辺のことが気になる方には、稲垣栄洋著「働かないの2割はサボっている」と長谷川英祐著「働かないアリに意義がある」を紹介しておきます。

2012年のNHK大河ドラマは「平清盛」で「平家物語」と密接な関係があります。古典の「平家物語」自体いくつかの「写本・異本」があり、ドラマの原作本や解説本その他、吉川英治氏の「新平家物語」、平家物語としての宮尾登美子本、森村誠一本などをはじめ平家物語関連本は多数存在します。どこが平家物語か？と思わせる「双調平家物語」（橋本治著）も面白い。「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理を顕す。奢れる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。猛き者もつひには滅びぬ、ひとへに風の前の塵に同じ。・・・」平家物語は語り物故に暗唱できれば心も豊かになるでしょう。

事実を正確に論じている科学技術論文などは構えて読まないといけませんが、文学作品などは著者によって解釈が異なるから、構えて読むというのは危険だと思います。まずは構えないでいろいろな本を読んでみてはいかがでしょうか。新発見があり、思わぬ拾い物があり、視野が広がる思いをするはずですよ。

# 多読表彰について

## 【クラス多読表彰】

クラス多読表彰は、図書館の統計に基づき、一人当たりの貸し出し冊数の多いクラスを表彰し、これを機に学生が一層図書館を活用することを期待するものです。なお、表彰されたクラスには副賞として、希望図書を購入ができる権利を贈りました。

- 第1位 機械工学科4年 (41.6冊/人)
- 第2位 機械工学科5年 (26.3冊/人)
- 第3位 物質化学工学科4年 (24.8冊/人)
- 第4位 電気工学科3年 (23.8冊/人)
- 第4位 電子制御工学科3年 (23.8冊/人)



## 【個人多読表彰】

個人多読表彰は、図書館の統計に基づき、貸し出し冊数の多い学生個人を表彰し、これを機に学生が一層図書館を活用することを期待するものです。なお、表彰された学生には副賞として、図書カードを贈りました。

- |               |        |               |         |
|---------------|--------|---------------|---------|
| 第1位 機械工学科3年   | 澤井久実さん | 第6位 電気工学科4年   | 竹山紘平さん  |
| 第2位 情報工学科4年   | 岸本光さん  | 第7位 物質化学工学科3年 | 松下由賀子さん |
| 第3位 物質化学工学科5年 | 岩川卓矢さん | 第8位 物質化学工学科4年 | 盤井秀香さん  |
| 第4位 機械工学科4年   | ペイさん   | 第9位 情報工学科4年   | 一ノ瀬智浩さん |
| 第5位 機械工学科5年   | 成田雄作さん | 第9位 電子制御工学科3年 | 大内紳司さん  |

表彰式は1月6日(金)昼休みに校長室にて行われました(5ページの写真をご覧ください)。

## たくさんの寄贈図書ありがとうございました

学生図書委員会が、読み終えたライトノベルや、もう合格して必要のなくなった資格試験の問題集や参考書等の寄贈図書を1月末～2月にかけて募集しましたところ、図書館入口付近に置いた2つの回収箱はいっぱいになりました。寄贈して下さった方々にお礼申し上げます。募集期間を過ぎましたが、図書館では常に寄贈図書をお待ちしておりますので、よろしく願いいたします。



皆様から寄せられた図書

## ☆第1回寄贈図書大募集☆



平成 23 年度

## 読書感想文コンクールを終えて

情報メディア教育センター運営委員会

第 36 回校内読書感想文コンクールの審査結果を以下に発表します。1 年生からは 200 編、2 年生からは 186 編、3 年生から 24 編、合計で 410 編の応募がありました。3 年生の応募が多かったのが特徴的です。情報メディア教育センター運営委員会の教員 9 名と国語科教員 3 名が審査と投票を行った結果、以下のとおり 8 名の入選者を決定しました。すでに 1 月 6 日の放送による全校集会でもお知らせしましたが、ここに改めて入選者の氏名と作品名を掲げ、その栄誉を大いに称えたいと思います。また、惜しくも入選には至りませんでした。審査の過程で優れた評価を得て、最終選考に残った感想文を佳作とし、それらの作者名を併せて紹介します。

### 最優秀賞

該当なし

### 優秀賞

機械工学科 1 年	鈴木 耕太	「『原発のウソ』にみる研究者の執念」
機械工学科 1 年	田端 信哉	「人間を食うとは…『ひかりごけ』を読んで」
情報工学科 1 年	齊藤 裕介	「足下の土」
物質化学工学科 1 年	隅谷 大良	「人間に求められている変身 - 『変身』を読んで」
物質化学工学科 1 年	西條 真由	「今を諦めない力」
機械工学科 2 年	南 慎一郎	「人は、なんで生きるんでしょう - 『夜回り先生 こころの授業』を読んで -」
情報工学科 2 年	高橋 佑里	「昭和と平成 - それぞれの豊かさ -」
物質化学工学科 2 年	中野 雄太	「民族と精神の独立 - ガンジー自伝に見る」

### 佳作

1M 木村 瞭太	1E 高木 俊裕	1E 板坂 将希	1 E 廣安 亮
1 S 美澤 晴太	1 S 魚島 圭輔	1 S 高城 凱	1 I 石本 まりな
1 I 長江 優花	1 C 野村 麻妃	2 M 中田 瑞生	2 M 北川 慎吾
2 E 浦野 慎啓	2 E 川原 翔太	2 E 中平 悠大	2 S 陳 日賢
2 S 梶原 雄士	2 S 今西 悠	2 I 倉橋 亮	2 I 原 一彰
2 C 森 奈津子	2 C 齋藤 聖	2 C 辰巳 祐哉	3 M 中島 甲葵
3 E 倉田 沙紀	3 S 大内 紳司	3 C 宗岡 詩織	

さて、ここからは作品の講評になります。まずは候補作の全体的な印象から。今年度については 1 年生の作品にしっかりしたものが多かったかな、というのが私の感想でしたが、審査員全員の投票結果にもそれが表れているようで、8 作の優秀賞のうち 5 作が 1 年生のものとなりました。鋭敏な関心の網の目に引っ掛かったものが、柔軟な心を大きく揺るがせる。その感動を素直に表現できた作品が順当に評価されたと思います。皆さんには、ぜひ問題意識や豊かな感受性を失わないでいてほしいですね。そして、さらに知識を増やし、論理を磨き、表現を培ってほしいです。

1M 鈴木君の作品は、福島での原発事故を受けた科学者小出裕章の告発本を扱っている点でタイムリーなものです。その芯にあるものは「研究者としての姿勢」に対する真摯な視線であり、信念をもって使命を果たそうとする一研究者に対するリスペクトの心です。鈴木君のその姿勢こそは、おそらくいつの時代にも通じる「学ぼうとする者」の基本姿勢であるがゆえに、読む側の私たちにも力を与えてくれるのだと思いました。

同じく 1M の田端君は、人肉食という重いテーマを扱っています。人間の真の姿とは、また、人が人を裁くとは、といった簡単には答えを出せない大変難しい問題です。それを観念的な「遠い」問題にしてしまわずに、論理を生かした想像力をもって顧みることで自分自身の問題にしているところを高く評価したいです。

カニバリズムといえば、この武田泰淳の戯曲仕立ての小説以外に、小説では太平洋戦争末期のフィリピン戦線を舞台にした『野火』（大岡昇平）、ノンフィクションではアンデス山中に墜落した飛行機の乗客たち（多くは同じラグビーチームのメンバーだった）を扱った『生存者』（P・P・リード）、ドキュメンタリー映画ではニューギニア戦の生き残り兵がかつての上官たちを問いつめて銃殺事件の真相を究明しようとする『ゆきゆきて、神軍』（原一男）、あるいはパリの日本人留学生佐川一政が実際に犯した事件（これはのちに唐十郎が『佐川君からの手紙』に書き、本人は『霧の中』を書いた）、最近のエッセイでは「食」についてその多様な側面を網羅しつつ考え尽くそうと試みる『空腹について』（著者の雑賀恵子は薬学部と文学部を出て、農学部の大学院を修了している人）などがすぐに思い浮かびますが、関心のある人はふれてみて下さい。

1I 齋藤君が読んだのは、「良い医者」とはという問題の前に迷い悩む若い医師が主人公の小説です。齋藤君は、医療の現状とその問題点を整理した上で、主人公のどの点が自分を感動させたのかを考え、それが患者本位の姿勢であることを突き止めます。最後の締め言葉はアフォリズムのようでもあり、汎用性が高そうです。

1C の隅谷君は世界的に著名なカフカの作品を相手にしました。一家の大黒柱である主人公が何故か虫に変身してしまふ。隅谷君は、その不条理を問題にはせず、残された家族にむしろ着目して、家族こそが「変身」する物語として読んでいきます。家族三人を一人の人間の心と見立て、その「変心」として寓意的に読む読み方はユニーク、かつ無理矢理なくらいに前向きなもので、とても感心しました。

同じく1Cの西條さんは、近年感想文の多い森絵都の小説を読み、魂が自分自身であった人間のもとに戻れたのはどうしてかを考えます。自分を信じ愛することの難しさや大切さ、生きることのかげがえのなさが伝わる文章になっています。

2M 南君は、夜間高校教諭水谷修の本を扱っています。自分をゆっくり振り返る時間もないような生活の中で、母親に勧められて読んだ本だったようですが、家族や周囲の大人たちに見放され居場所を失った若者たちの実態を知り、当たり前と思っていた自分の置かれている状況のありがたさ、幸せを再確認することになりました。

2I 高橋さんは、大ヒット映画の山本甲士によるノベライズ作品を取り上げました。東京タワーができた頃の昭和の昔とその頃よりずっと生活が便利になった平成の今を比較して、「本当の意味での豊かさ」とは何か、と問いかけ、自分たちが頑張り抜くことこそが、その鍵を握っていることを示唆しています。

2Cの中野君は、インド独立の父マハトマ・ガンジーの自伝を読んでいます。中野君が的確に指摘しているように、よりよき世界の実現を願う私たちにとって、ガンジーの示した節制的な生活、他者に依存しない独立心、真理を探究する上での寛容の精神、政治的行動としての「非暴力、不服従」運動など、見習うべき点が多々ありそうです。

最後になりましたが、読むという、そこで行われていることを言い表すのが大変難しい行為を、これまた困難な、書くという行為でもって文章に結晶化させ、それを披露してくれた皆さんに、ご苦労様とありがとうございます。そして来年度も、今年度に負けないくらい多数の力作の応募を心から期待したいと思います。

(国語科 武田)



読書感想文入選者と多読表彰された皆さん（クラス多読は代表者）

# 読書感想文入賞作品

『原発のウソ』 小出裕章 著

## 『原発のウソ』に見る研究者の信念

1M 鈴木 耕太

2011年3月11日、いつものように学校から帰ってきた僕は、テレビの画面に映し出された衝撃的な映像に釘付けになった。大津波が家や田畑を押し流していた。マグニチュード9.0もの巨大地震が東北地方を襲ったのだ。しかし、それだけでは終わらなかった。福島第一原発で重大な事故が起きていたのだ。地震と津波によって一切の電源が断たれてしまったために、原子炉を冷却できなくなり、大量の放射性物質が漏れ出してしまった。日を追うごとに事態は深刻化し、放射性物質による土壌や農産物の汚染の問題が浮上した。さらには、周辺住民が自分の故郷を捨てて、他の土地へと避難しなければならぬ事態になってしまった。けれどもその間、政府は大気中に放射線量は、直ちに被害の出る数値ではないと発表し続けてきた。

これに対して科学者の立場から異を唱えた人がいる。『原発のウソ』の著者、京都大学原子炉研究所の小出裕章氏だ。

小出氏は、その著書の中で人体に影響のない程度の「安全な被曝」など存在せず、低レベルの被曝は人体に害がないという考え方が間違いであることを指摘している。さらには放射線を直接浴びる外部被曝よりも、放射性物質を体内に取り込む内部被曝、特にプルトニウム239などの吸入による肺への取り込みが一番の問題であるとも述べている。

このような点から、小出氏は「原発は危険であり、すべての原発を止めるべきだ」と主張している。

僕はこの本を読むまで、原発にはリスクもあるけれども、私たちの生活にはどうしても必要なものだと思っていた。しかし、小出氏は、原発の必要性までも否定している。その理由は小出氏によると原発のコストは決して安くはなく、二酸化炭素を出さずに環境にやさしいというのはウソであり、海水を暖めることによって地球環境を破壊し、化石燃料の枯

渇により未来のエネルギーは原子力しかないというのは全くの誤りであり、使用済み核燃料を再処理して活用する核燃料サイクル計画自体すでに破綻しているからである。

僕は驚いた。ここまで原発のデメリットを突き付けられると、僕の原発に対する考え方をさえざるを得ない。

けれども、もっと僕を驚かせたのは、小出氏が『かつて原子力に夢を持ち、研究に足を踏み入れた』人だということだ。

『でも原子力のことを学んで、その危険性を知り、自分の考えを180度変えました』『原子力のメリットよりも人間の命や子どもたちの将来のほうがずっと大事です』と言うのである。

自分がこれまでに志してきた原子力の平和利用という考えを「180度変えた」という言葉は、小出氏の研究者としての姿勢を表していると思う。研究者は、自分の研究が新しい技術として世の中の役に立ち、人々を幸せにするものと信じて、ひたすら研究に打ち込むのだと思う。でもその新しい技術が危険なものだと知ったとき、彼は今まで積み重ねてきたものを否定し、自分の考えを変え、反対する立場に回った。ただならぬ葛藤と決心があったことだろう。

そこには、著者の研究に携わる者としての確固たる信念がうかがえる。僕は小出氏の一人の研究者として使命を果たそうとする姿勢に尊敬を覚える。

僕も将来は、研究に携わりたいと思っている。小出氏のような信念をもった研究者になりたい。

『ひかりごけ』 武田泰淳 著

## 人間を食うとは…

— 「ひかりごけ」を読んで—

1M 田端 信哉

「人間の肉を食った者の首には緑金色の光の輪がかかる。」こういう伝説のもとで物語は進行する。吹雪の中で四人の男が船を出し難波する。数日で食

料は尽き、男たちは餓死寸前の苦しみの中にいた。衰弱が激しい五助が言った。「俺が死んだらお前たちは、俺を食うつもなだろう。」八蔵は絶対に五助の肉を食ったりしないことを約束するが、船長と西川は冷たい目で五助を見ている。その後、五助は死亡する。船長と西川はアザラシの肉でもさばくかのように淡々と五助の死体をナイフで切り分けてその肉を食べるのだが、その姿が冷静であればあるほど狂気の度合いは増していくように思われた。八蔵だけは、食わないという約束を守り通した。飢えと渇きの苦しみの中で、緑金色の光の輪が二人の首に現れるのを見て、八蔵は恐れおののいた。人間の肉を食っていない者にだけそれが見える。伝説は本当だったのだ。船長と西川も人間の肉を食いたかったわけではないはずだ。生きるために人間でも食わないといけない極限の状況。

生きるか死ぬか。私はそんな選択を追られることのない日々を送っている。もし私がそんな状況に出会ったとしたらどうだろう。船長や西川と同じように私も人間の肉を食うのだろうか。餓死するくらいなら罪を犯してでも生き残りたいと思う。それが人間なのではないか。どうせ死んだ人間には自分が食われたなんてわかりはしない。逆の立場だとしても、私は自分が食われても構わない。それで誰かが生きられるのなら食って生き残ってほしいと思う。まもなく八蔵も死に、船長と西川に食われる。ここまでくればもう当たり前だ。死んだ人間が食料にされることに読者はもう慣れている。

だがここで物語が大きく変化する。ついに食べるものがなくなり、船長はその肉を食うために西川を殺害するのだ。死んだ人間を食うのと、生きている人間を殺して食うのでは意味がまるで違う。殺人は許されない罪だ。一番重い罪だ。だとすれば、早く死ね、早く死ねと、さっさと八蔵が死んで自分たちの食料になってくれることを願っていた二人の感覚は正常なのだとということになる。考えれば考えるほどわからなくなる。いずれにしる、人を殺すくらいなら、自殺して自分の肉を差し出すほうがまだ。でも、人間はいざとなったら何をしでかすかわからない。人間の恐ろしいところだ。

生き残って生還した船長は裁判にかけられ人の肉

を食ったことを検事から追及される。すべての裁判関係者、傍聴席の人々、憎しみに満ちた視線が船長をとりまき裁判は進行する。やがて、人間を食った船長の首に緑金色の光の輪が現れる。しかし、誰もそれに気づかない。人間を食っていない者にはその光の輪が見えるはずなのに誰も気づかない。しかしそれだけでは終わらない。その次がラストシーンだ。

驚いたことに、光の輪は検事の首にも現れたのだ。そして裁判長、弁護人にも、ついには傍聴席の男女の首にも次々と光の輪が現れたのだ。それは、その場にいたすべての人々が人を食ったのと同じくらいの罪を犯しているということだった。生きるか死ぬかの極限の状況で人肉を食った人間がいる。そんな目にあうこともなくのうのうと生きてきた大勢の人間がいる。そして、船長を悪者にして裁判をする。それが人を食うのと同じくらい恐ろしいことなのだ。と作者は言いたいのだと思う。

私自身も船長を憎みながらこの作品を読んでいたことをここで思い出した。西川を殺すまでして食った船長を私も憎んでいたのだ。

もしかすると、私の首にも緑金色の光の輪が現れているかもしれない。

『神様のカルテ』夏川草介 著

## 足下の土

II 齊藤 裕介

僕は主人公で医者、一止の行動に感動した。なぜなら、その行動は、いつ容態が急変するかわからない患者に、より良い最期を迎えてもらおうと、外に出て山を見たいという希望を叶えてあげたり、大学病院に入院を断られた人を受け入れたり、患者の気持ちがきちんと考えられた行動だったからだ。しかし、感動するということは、このような医者を僕が一度も見たり聞いたりしたことがないということだと思った。メディアで取り上げられるのは高度な医療を行う医者が多くて、一止のように地方病院で働く医者はあまり見ない気がする。今は医者不足の世の中だから、一止のように患者を優先しててんでこまいで働く医者も全国に何人かはいるはずだと

思う。一止が『『良い医者』にはなりたい。だが何をもって『良い医者』とするのか。』と考えるシーンがあるが、患者の気持ちを第一に考えて行動できる一止は十分『良い医者』だと思った。

もちろん、高度な医療で人々を救う医者も世の中には必要なわけで、部長先生の「医者にだって向き不向きがある。最先端から一般医療まで、一人で全部できる必要はねえわな。」の言葉通り、いろいろなタイプの医療が一つの地域にまとまっていれば最高の体制だと思った。でも現状は、都会には高度医療、田舎には地方病院というパターンが多いから、たらい回しや、医者の不足が起こるのだろう。

「医者」を辞書で引くと、「病気や傷を診察・治療する人」とあり、「死にゆく年寄りを看取る人」とは載っていない。しかし、そのような医者も現代では求められていると思った。治療法がない年寄りの患者に、「あと半年の命だから、好きなことをして過ごしてください。」という様なことを言った医者が登場していたが、言われる側の気持ちを無視していて、本末転倒であると思った。

改めて考えてみると、『『良い医者』かどうかを決めるのは、その医者自身でもなく、看護師でもなく、患者なのだと思った。そう考えてみると、患者からしたら、人生の最後の数ヶ月を孤独で過ごすのと、医者や家族等に見守られながら過ごすのは大違いなのだから、終わりよければすべて良しと言うと簡単すぎるかもしれないが、辞書に載っていないくても、人を看取る仕事はとても大切だと思った。

インドで医療活動をしていたマザーテレサは、「あなたが手厚く看護している人たちは、絶対に助からない病気の人たちです。それなのに、なぜそこまで一生懸命なのですか？」という質問に対し、「わたしは彼らに『生まれてきてよかった』と一瞬でもいいから思ってもらいたいのです。」と答えたそうだが、一止の行動に通じる所があると思った。

「迷うた時こそ立ち止まり、足下に槌をふるえばよい。」と一止が思うシーンがある。自分の人生を決めるのは自分だが、足下の土に目を向けずにいては、後で後悔することにもなりかねない。重大な決断を迫られた時は、本来の目的や望みをもう一度掘り出してみることが大切だと思った。実は、結論はす

に出ていて、それに気づくかどうかなのだと思った。

『変身』フランツ・カフカ 著 高橋義孝 訳

## 人間に求められている変身

－「変身」を読んで－

IC 隅谷 大良

この本を読む前から私は、何かあるに違いないと思っていました。フランツ・カフカは、何もメッセージの無い小説を書くような人ではない、と思っていました。まさにその通りでした。しかし、どんなメッセージなのかは分かりませんでした。それでも、よく考えた結果、どうにかたどりつくことができました。これは、あくまでも私一人が感じたいくつかの意見のうちの一つです。

それは、人が遂げなければならない変化です。人生の中で避けては通れない変革です。それは他から強制的にさせられることもありますし、自ら始めなければならないこともあります。この物語をなぜそう解釈したのかというと、最終的な結末は、良い結果になっている、と私は判断したからです。唯一の収入源だった息子が虫になってしまったことで、年を取って太っている、五年も働いていなかった父親はきっちりと身だしなみを整えて働きだし、体が弱かった母親は針仕事をするようになり、遊び暮らしていた娘は売子になりました。みんな働くようになったのです。もう高額収入は望めなくても、将来が有望な仕事に就けて、三人は幸せでした。

私は、この家族が、一人の人の心を表しているような気がします。これまでは、一つの考え方、グレーゴル・ザムザに頼っていました。彼が一番重要で、心の中心でした。ところが、彼は突然虫になります。役に立たなくなります。その考え方が、良いものではないことが明らかになります。もう彼は中心ではなくなります。そこで、全く新しい考え方をしなければならなくなります。そして、一つの見方ではなく、グレーゴルの父、母、妹で表されているような三つの異なった考え方ができるようになります。変化している時期には、次々と入れ替わる召使や、下宿する三人の紳士で表されるような、気を散らすも

のが色々入ってきます。その心が再び安定をとり戻すには、けっきょく、グレーゴル、紳士たち、手強い女という三つのものを排除しなければなりません。そうしてようやく、幸福を手に入れることができたのです。変化することは、簡単ではありません。自分の中心的な考えが良くないものであることを、認めなければならないこともあります。ときには、それが良くないものだと認めたくなくなる時もあるでしょう。それでも、変えなければならないものはあるのです。

このようなことは、起こり得ることです。自分が、良くない考え方をしていることが分かったら、どうするでしょうか。本当は、良くない、などということはないのではないかと、すぐに元通りになるのではないかと、考えるのでしょうか。それとも、自分の間違いを認めて、大きな変化を遂げるのでしょうか。私は、この本がそのような問いを投げかけていると思いました。追いつけなければならぬものが三つもある、とても大きな変化を、この家族は経験したからです。

私は、この本は間違いなく傑作だと思います。また、私が思ったのとは別の読み方もあるな、とも思います。この、「変身」という題名ですが、グレーゴルが虫になることで「変身」は終わりではなく、この家族全体に起こった一連の変化が「変身」ではないかと思っています。私は、この家族のように変身できるのでしょうか。是非とも、それがどんなにつらいことだとしても、大きな変化を遂げられる人に、私はなりたいと思います。

『カラフル』 森絵都 著

## 今を諦めない力

1C 西條 真由

私は、森絵都の『カラフル』を読みました。この話は、死んだ魂が神様の抽選に当たるところから始まります。抽選の内容とは、死んだ魂が現世へ送られ、仮の体に入り、罪を気付くことが出来れば輪廻に戻れ生まれ変わることができるが、出来なければ、本当はそうになっていたように泡になってシュッと消えてしまうというものでした。魂はついさっき自殺をして死んだ小林

真という中学三年生の体を借り、その家族と付き合い、小林真として生きることになります。

私がこの話で感じ思ったことは、自分を受け入れることで他人から受け入れてもらえるということです。自分を信じ愛せなければ、信じ愛してもらうことはできないと思います。そして、当たり前ですが、簡単に命を捨ててはいけないうことです。思春期という不安定な時期、ただでさえ感情のコントロールがききにくいのに、真はたくさんの処理できない問題を一気に突きつけられました。思いを寄せていた女の子が援助交際していたり、明るくてチャレンジャー精神が旺盛な母が不倫、絵にかいたように正義感の強い父が会社の不祥事により昇進で舞い上がってしまったことです。真は数少ない支えにしていた人達が真の思っていた人とは違ったことに動揺し、そう思っていた自分がいやになったんだと思います。それを伝える友達もいなくて、真は死を選びました。始め、強気な魂は真を馬鹿にしていました。気が弱くて、ブサイクで、身長が低くて残念なやつだと。しかし、事実は魂は小林真の魂でした。魂の罪は自分を殺したという罪でした。魂と真、どちらも同じ人なのに違う性格でした。それは多分、もう一人の真なんだと私は思いました。人には、強気な自分、弱気な自分、たくさんの自分が存在すると思います。また、それを制御する自分もいて、真はその自分が大きくて感情を前に出すことが出来なかったんだと思います。本当は友達が欲しくて、かっこもつけたくて、でも出来なくて。そういう普通のことが真はずっとしたかったんだなと思いました。でも、周りが変わり者扱いをして受け入れてくれなかった。魂は前髪をあげて雰囲気を変えようと思いました。魂は真を客観的に見つめることで、意地をはっていた真をなりたかった真にしたような気がします。それをすることで、例えば強気な自分が弱気な自分を許せ、几帳面な自分が適当な自分を許せたり自分を受け入れ愛せるように思います。そんな風に魂は真を受け入れられたんじゃないかなと思いました。だから、魂は自分の罪に気付けたような気がします。魂が真として過ごしているうちに、いい変化がたくさんありました。母は不倫をやめ、父は上司の不正を正そうとして飛ばされ、それでも耐えて、やっと巡

ってきたチャンスに喜んでいて、真を馬鹿にしていた兄貴は、真が意識不明、心配停止状態から生き返ったことに感動し、医者を目指そうとしています。その変化は、魂が真を変え受け入れようと思ったこともあると思いますが、魂は真自信なので、真もその力はあったはずで、きっかけさえあれば真でも出来たはずで、だからきっと、生きていればなんとかなるんです。私はどんなに苦しくても死を選んではいけないと思いました。人間、死ねば終わりなのです。年間三万人もの自殺者がいます。悩み、ドン底を味わい自殺した、真と同じような人は大勢いると思います。真はもう一度再スタートを切れましたが、現実にはそうはいきません。今を諦めずに生きてほしいと思います。

『夜回り先生 ころの授業』水谷修 著

## 人は、なんで生きるんでしょう

－「夜回り先生 ころの授業」を読んで－

2M 南慎一郎

この本を読むようになったのは、母の一言であった。毎日、通学と部活動の時間で、ほとんど家に帰るころには、疲れきっている自分は、ゆっくり自分のことをふり返る時間がない。また、普段の生活の中で出会うのは、自分と同じ状況の友達がほとんどである。疲れて帰ってきた時、家族が話しかけてきても、話をしたくない時があり、そんな時はつい、ぶっきらぼうに答えてしまい、雰囲気悪くしてしまう。そのようなことが続いたある日、母が、

「この本を読んでみたらどう？」

と渡されたのがこの本だった。この本の中の『夜回り先生』こと水谷修先生は、夜間高校に赴任すると同時に「夜回り」を始めた。深夜に公園や繁華街を回り、そこでたむろする子どもたちに声をかけ帰らせる。薬物の問題を抱えた子どもたちには、命がけで関わり、救いの手をさしのべてきた先生である。

読み始めるうちに、自分の生活を犠牲にして、たくさん居場所がなく、さまよっている子どもたちに声をかけ、正しい道へ導こうとしておられる先生の姿に感動し、それと同時に、

「なぜそこまでできるんだろう。」

という疑問がわいてきた。そして、読み進んでいくと、感動が尊敬になり、ある子どもを守るためにヤクザに指をつぶされた場面を読んだ時には、水谷先生の魂の強さに畏敬の念を感じた。でも

「なぜ、そこまで……」

の疑問は消えないまま、読み続けた。また、先生は、子どもを叱ったり、怒鳴ったり、殴ったりしたことがない。先生のように、子どもを信じ、慈しみ愛し育てる大人ばかりの世の中であれば、夜にたむろする子どもたちは、一人もいないはずだと思う。でも現実違う。この本に書かれていた実際の子どもたちの状態は、居場所がなく、家族、周りの大人たちに見放され、非行や薬物に走ってしまい苦しんでいた。そんな状況がたくさん描かれていた。『描かれていた』と表現してしまうのは、自分の周りにそんな状況の子どもたちはいないからだ。そこで、気が付いた。自分があたりまえのように感じている、家族、学校、生活があたりまえでない若者が今いるんだということ。どんな子どもも、この世に生まれた時は、しあわせになりたいと思ってるし周りの大人を頼りにしてるし、信じていると思う。そして、大人に大切にされる中で、子どもたちは、関わる人たちをしあわせにしていこうと思う。『人は、なんで生きるんだろう。それは、だれかを幸せにするため』だとは、水谷先生は、述べている。

自分の生活に目を向けてみた。あたりまえすぎて忘れてることが多い。これから、疲れた時、しんどい時でもこの水谷先生の言葉を思い出したいと思う。『だれかを幸せ』にすることは、大きすぎることであるが、こだわりを持っていこうと思う。

『ALWAYS 三丁目の夕日』山本甲士 著

## 昭和と平成

－それぞれの豊かさ－

2I 高橋 佑里

舞台は昭和三十三年のとある下町。東京タワーが完成し、メートル法に移行してもまだまだ庶民には尺貫法のほうが分かりやすい。力道山が国民の英雄

で、それを見るために見知った町の人と街頭テレビの前で群がり応援に燃える。遠くの親戚より近くの他人がまんま当てはまる…、そんな時代を生きた人々—鈴木オートの社長、小説家を目指す茶川竜介を始めこの町の住人—の物語が綴られているお話です。

私はこの本を読み終えた感想としてあたたかいなと思いました。人のために本気で怒れ、自分を犠牲にしてまでも人のために何かをしました。そのひとつひとつは小さいことかもしれないけれども、その小さな気遣いがつながり、心にじんわりくるものがありました。例えば、女手一つで子供四人を育てているお母さんに近所の商店街の人は手助けをしたり、家計が苦しくて傘が一本しかないのに学校帰りに傘をなくしてしまい、お父さんに謝るとその場で新しい、そして当時高かったナイロンの傘を三本買ったという話からもあたたかさがうかがえると思います。また、あたたかいだけでなく明るいなとも思いました。そして、心の豊かさを持った時代だなと印象付けられました。この時代から考えると、現代は驚くほど便利に、そして豊かになったなと思います。この当時生きていた人々はまさか五十年後の未来に携帯電話やメールの存在、ましてや日本人の殆どがこれらを持つなどは想像もできなかったでしょう。だけれども、現代を生きる私たちは本当に豊かになったといえるのでしょうか。確かに、携帯電話もパソコンも、テレビだって庶民にはまだまだ手の届かなかった時と比べれば、今は沢山のデジタル機器が身の回りに溢れ豊かになった様に見えます。けれども、この本からはこの時代を生きた人々がひたすら前に向かって明るく進んでゆく様に感じられました。しかし、現代を生きる私たちは夢を見ることも少なく、冷めた態度で「どうせ…」と考えている様に思えます。けれども、小さなことにでも一喜一憂して、がむしゃらに生きてゆくこの時代のほうが人間臭くて、でも楽しく、現代人が忘れてしまった心の豊かさを持っているのではないかと思います。

この本の住人たちが生きた昭和の時代から現代は、はや五十年。今日私たちが見ている夕日も、当時の人々の見ていたあの夕日と、きっと変わらず美しく、そして何か懐かしい感じがしているに違いありません。

ん。また、五十年先の未来、今度は自分達が頑張りをぬいた後、本当の意味での豊かさをもって、また今日と同じ夕日が見られればいいなと思います。

『ガンジー自伝』マハトマ・ガンジー 著

## 民族と精神の独立

—ガンジー自伝にみる—

2C 中野 雄太

ガンジー（マハトマ・ガンジー）は、インド独立運動を先導し、また「非暴力」思想を世界に知らしめた人として多くの人に知られている。では、ガンジーはどのような思想、精神を持って生きた人なのだろうか。本書はガンジー自身による自伝であり、私達にとっては歴史上の人物であるガンジーの人間像をとらえることで、それを明らかにしてくれた。

ガンジーは子供の頃から、両親から受け継がれたヒンドゥーの教えに従って誠実で質素な生活を送っていた。しかし、イギリスから渡ってきた欧米文化（肉食やキリスト教の習慣）に周囲の人々が影響されていく中で、ガンジー自身もそれに倣った時期があったのだ。また、ガンジーは学業や仕事（弁護士など）のために住んでいたイギリスや南アフリカで、宗教的儀礼を含めた彼自身の習慣に対する迫害や民族的差別を数多く受けた。こうした経験の中で、彼は自分の生活を見つめ直し、質素で節制的な生活を確立していったのだ。まさに“清貧”ともいえる彼の生活が、のちの彼の活動に大きく影響を与えたのではないかと私は思う。野菜や果実、穀物を必要な量だけ食し、嗜好品（コーヒーや紅茶などの飲料も含まれる）を控え、移動の際には乗物を使わず歩行に頼る、といった生活は、身体の健康を維持するという意味だけでなく、精神を鋭敏にし、他者に依存しない独立心を養うといった意味でも理に適ったものではないだろうか。飽食、美食家であり、科学技術の恩恵に頼りがちな現代人にとって、こうした生活は困難に感じられるだろうが、人間に本来備わっている精神力と独立心というのは案外原始的手法

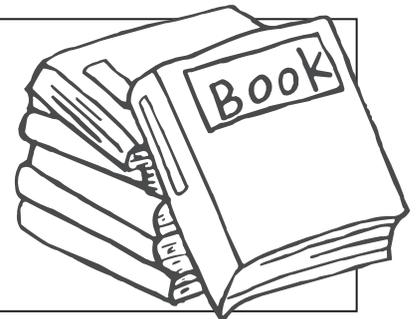
(ガンジーの実行していたような節制的生活)で培われるのだと感じた。これは、のちにガンジーが数々の政治的活動(主にインド独立運動や労働者のための運動)の根本的な思想や理念と結びつくことになる。また、彼は信仰心を大切にしていた。当初、西欧文化の代表的存在である基督教のことを、土着のヒンドゥー文化を迫害し自分の宗教を押しつけるキリスト教徒の存在によって、彼は大変毛嫌いしていたらしい。しかし、彼がいろいろの宗教の経典を学んでいくにつれて、宗派の違いはあるにせよ、偉大な存在(ここでは神)に近づくために徳を積むという点で共通していることに気づく。既存の宗教的枠組みを超えたところに宗教的“真理”を感じとっていた彼は、当時においては非常に先鋭的存在であったに違いない。現代でも各種の宗教的紛争はまだまだ残っているが、ガンジーの思想を受け継ぎ、信仰心とは“みかけ”の形態(宗派や枠組み)よりも真理(人間の徳や精神を高めてくれるもの)に到達することが肝要なのだということに多くの人が

気づくべきであろう。

さて、ガンジーは種々の政治活動を行ったが、彼はいつも貧しい人、不利な立場にある人とともに行動をしていた。イギリスはインドの宗主国として植民地支配をしていたが、その圧政に苦しむ被支配層のインド人を救済、統率して、何より暴力的手段によらずしてインドの解放を訴えていったのであった。この「非暴力」による訴えというのは、土着民族の自治と独立を促進させる上で最も効果的かつ現代に通じる先進的手段であると思う。なぜならば、暴力的手段による革命や運動は、一部の“暴徒”がわけもわからず群集心理によって更なる混乱を招いてしまうことがあるのに対して、「非暴力」運動は皆が冷静、着実に一丸となって取り組めるからである。ガンジーはインドの人々の民族的精神を独立させた。彼の遺志が、インドのみならず世界の人々に受け継がれることを私は願っている。

### 返却期限を守ってください

期限内に読みきれなかった図書(雑誌)は、他の人に予約されていなければ貸出期間を延長することができます。また、学生のみなさんには春休みなど長期休暇中は、長期貸出ができます。図書は10冊まで借りられます。返却期日は休み明けの日です。長期休暇中、開館は平日17時まで、土曜は閉館となりますが、多くのご利用をお待ちしております。



### 2階の耐震工事が完了しました。

昨年12月27日に、2階本棚がすべて耐震補強されました。本棚上部に支柱を取り付けました。皆様に安心して利用していただけることを願っています。



# ブックハンティング



11月19日（土）に、ジュンク堂書店大阪本店で第2回ブックハンティングを行い、専門書を中心に、計340冊の本を購入しました。以下は参加者のコメントです。

**1M 畑中**：今回のブックハンティングで図書館にたくさんの本が増えることになってとても嬉しいです。**1E 大西**：本を探す時間が前回の30分から2倍の1時間になったのでゆっくりさがすことができました。専門書には高いものが多いのでこのような企画があると嬉しいです。**1S 魚島**：今回のブックハンティングは前回と比べてリクエストも増え、少しではありましたが、小説以外も入っていました。これからも図書館に興味を持って利用してもらいたいと思います。**1C 石見**：いろいろな本が買えて、すごくうれしかったです。**2S 石川**：普段は絶対に手にしないような高価な本も買うことができるので、本当に貴重なイベントだと思う。また、時間に余裕があったので、自分で読みたい本も探すことができた。減多にたちよらないような大きな書店で本を探すことができて良かった。**2I 酒井**：書店が広くてびっくりした。そのため、本が見つげにくかった。**2C 中谷**：今回のブックハンティングで私は2回目でしたが、やっぱり圧倒されるような本の数でとてもすごかったです。そのたくさんの本の中から欲しい本を探すとすると機械でどこにあるか知っていても範囲が大きかったので大変でした。**3M 井上**：希望図書がたくさんあり、全て買うことができてよかった。専門の本もよさそうなのが買えてよかった。**3E 山田**：もう図書委員も3年目であり、ブックハンティングは非常に余裕をもって行うことができた。クラスメイトが希望していた本を同種の少々違った本などと共に買ってバリエーションを持たせることができたので良かったと思う。**3S 音田**：希望の本が買えたので良かったが、まだ購入したい本が多かったので予算をもう少し増やしてほしい。**3I 中島**：予算いっぱいまで買ってしまいうくらいに充実したハンティングでした。**3C 大和**：天気の悪いなか行ったので大変でした。本屋さんの中には「おすすめの本」のコーナーがあって買いたくなりました。**4S 寺居**：今回はクラスでの要望が多く、予算を超えるほどのものでした。ブックハ

ンティングでは実際に本を見て確認することがメリットなので、これからも要望が多くくることを期待しています。図書館では随時本の新規購入も募集しているのでそちらも利用してください。**4I 桑田**：必要だと思った専門書を購入でき、とても有意義だったと思います。**4I 山本**：進行に関しては滞りなく大きな問題は無かったと認識しています。**4C 栗田**：今回は希望図書をクラスで募集したが、あまり集まらなかったのではほとんど自分で選んだものばかりになってしまった。図書館への関心がもう少し傾ければと思う結果となりました。**5M 成田**：ブックハンティングに初めて参加したが、本を選考する立場になれて大変有意義な時間を過ごせたと思う。個人の感想としては小説が3割程度しか買えないのを、もう少し買えるようにしてほしいです。**5E 西尾**：今回のブックハンティングでは、勉強の参考になりそうなものを中心に本を選んでいったと思う。また、ジュンク堂は本の種類が多く、本を探すのに苦労した。**5S 山崎**：大型の書店は本の揃いがよく、近所の書店には置いていないような専門書や問題集も見つけられました。クラスの本を手に入れた後は店内を自由に見て回ることができ、話題の本も確認できてよかったです。**5I 里中**：前回よりも早く希望図書をみつけることができたので良かった。**5C 松浦**：本の内容を見て決められたので良かったです。**E12 中島**：専攻科で初めてブックハンティングに参加したが、自分の専門外の参考書などを探すのは楽しかった。その場で、個人的に買いたい本も見つかったので、参加して良かったと思います。



# 学生図書委員会 活動報告ほか

## 今年一年を振り返って… 4I 笹治 万樹

図書委員は今年で3回目となる4Iの笹治万樹です。今年度請け負ったのは図書委員長という大仕事。不安一杯、胸一杯、図書委員長としての一年間が始まりました。去年度は広報委員長でしたが、結局ほとんど仕事がなかったことを考えると、図書委員会の活動はすごく充実しています。他の学生生活面も充実すればいいのになあ（笑）。

さて、図書委員会では今年度も例年通り、春と秋のブックハンティング、秋の読書週間をメインに活動しました。

ブックハンティングは、学生から希望が出た本を図書委員が大阪のジュンク堂まで買いに行く活動です。交通費は支給されます。「交通費もかかるし、その分も含めてAmazonで買った方がいっぱい買えるじゃないか」とお思いの方、それは言わないお約束。このブックハンティング、希望の出るクラスと出ないクラスのムラが凄まじく、クラス予算の倍以上購入するクラスもあれば、クラス予算の2割程度しか購入しないクラスまであります。春には特に気にせず、いつものことといった感じで実施していましたが、秋のブックハンティングでは、あらかじめ希望が多いクラスに希望が少ないクラスの予算を割り当ててみました。これによって今までより、希望が多いクラスにまんべんなく予算を分配できたと思います。

秋の読書週間は、図書館に本の紹介コーナーを設置し、景品の出るアンケートクイズなども用意して、普段あまり図書館を利用しない人にもできるだけ利用してもらおうという活動です。毎年、テーマを決めて実施しており、今年のテーマは原子力になりました。少々重すぎたかなという意見も反省では見受けられましたが、これはこれでよかったかなと今は思います。ちなみに、秋の読書週間を準備の中で「3万円分くらい原子力関係の本を購入しよう」ということになったのが一番印象的です（汗。思いのほか原子力関連の本ってうちの図書館には置いてなかったみたいで、いい買い物だったと思います）。

委員会どころか学校に来るのもままならない時期もあった中、名倉先生や副委員長、会計担当者の支えがあったからこそここまでこれました。この一年間、本当にありがとう。あと少しの期間ではありますが、この情けない委員長を、どうかよろしくお願いします。

## ノンフィクションも面白い 2I 酒井 峻

私は小説や純文学など様々な本を読むが、今一番ハマっているのがノンフィクションである。ノンフィクションとは「虚構を交えず、事実を伝えようとする作品」（広辞苑）とある。ノンフィクションは人気のないジャンルで、2011年の毎日新聞のアンケートでは「どんなジャンルの本を読むか」で小説が37%だったのに対して、ノンフィクションは19%であった。ただ、私はノンフィクションが好きなので、いくつか紹介したいと思います。

私が、一番好きなノンフィクション作家は一橋文哉氏である。一橋氏は謎の多い人物で、元サンデー毎日

副編集長の広野伊佐美と言われているが、真相は定かではない。少し感情移入の多い部分はあるが、綿密な取材を行い、分かりやすく書かれている。一橋氏の作品に出合ったキッカケは「未解決—封印された五つの捜査報告」(新潮社)だった。書店で偶然この本を見つけてハマリ、その後、「宮崎勤事件—塗り潰されたシナリオ」(新潮社)、「三億円事件」(新潮社)を購入した。他にも一橋氏の著作はあるのだが、絶版になっているものが多く、「宮崎勤事件」も絶版だったが、ブックハンティングで行った書店に在庫があったので購入した。

一橋氏以外の著者では、「酒鬼薔薇事件」について書かれた高山文彦氏の『少年 A』14歳の肖像」(新潮社)も読んでいます。この作品は、供述調書に基づいて綿密に書かれており、感情移入が少なくかなり読みやすい作品となっている。

他にも、色々読みたい作品がある。豊田正義氏の「消された一家—北九州・連続監禁殺人事件」(新潮社)や佐野真一氏の「東電 OL 殺人事件」(新潮社)、高沢皓司氏の「宿命—「よど号」亡命者たちの秘密工作」(新潮社)などである。

最後に、私は事件系、特に殺人系のノンフィクションを読むことが多いですが、殺人者の気持ちなど理解したくない・出来ないです。私を危ない人と思って頂いても結構ですが、私自身は殺人者についての理解は一切できません。長文・乱文ながら最後まで読んで頂きありがとうございます。

## 「高専の数学」もなかなか面白い 3E 山田 諒明

奈良高専に通う皆さんには、良くも悪くも非常に馴染み深い本かと思います。2011年度入学の1年生からは別の教科書を使用しているそうですが、それ以上の学年では1～3年生の教科書およびその問題集の計6冊を買っているはずなので、シリーズ累計で見れば恐らく奈良高専生のベストセラーではないのでしょうか。もっとも、皆がきちんと読んでいるかという微妙なところですが…

「高専の」という題名からわかるように工学で使う数学、つまりは微分積分、線形代数などを身に付けるのを重視した内容になっています。具体的には、一般の高校数学の教科書から確率や統計といった内容の一部を削り、微積分などに関する内容を強化したといったものです。特段分かりやすいというわけでもありませんが、分かりにくいというわけでもないので高専で使う数学を学ぶには悪くないと思います。

とまあ内容を説明してみました。奈良高専生の皆さんは知っていることだったかと思います。ただ、3年の数学や高学年での専門の勉強をしてからもう一度、1年や2年の教科書や問題集を読んでも、「あの計算で使う式が練習問題としてこっそり載っているじゃないか」などの発見がありなかなか面白いと思います。皆さん、昔使った「高専の数学」を一度読み返してみてもどうでしょうか。

日経写真ニュース掲示板を設置しました。

1階入り口右側に設置しました。  
毎週タイムリーなニュースと写真が届きます。



## 読書週間行事・アンケート集計

本校図書館では学生会図書委員会の活動として、秋の読書週間の展示を行いました（11月1日～17日）。今年のテーマは「原子力」。このテーマに沿った本を集めて展示し、利用者の皆さんへ紹介しました。



読書週間の展示を見てくれた学生の皆さんに、プレゼントクイズへの応募とともにアンケートの記入をお願いしたところ、41名から回答がありました。その集計結果の一部を紹介합니다（集計作業は3M井上君が行ってくれました）。

### あなたは図書館をどのように利用しますか？

（複数回答）

勉強	28人
調べ物	25人
読書	13人
昼寝・その他	5人

### あなたは月に何冊ぐらい本を読みますか？

0冊	3人
1～2冊	16人
3～5冊	18人
6～10冊	3人
10冊以上	1人

### あなたがよく読む本のジャンルは何ですか？

（複数回答）

小説	26人
漫画	23人

ライトノベル	19人
専門書	19人
SF・ファンタジー	9人
ノンフィクション	7人
エッセイ	3人
その他	1人（ホラー）

### 今回の図書委員会の展示は？

また、展示を見て感じた事を書いてください。

興味深い	27人
面白い	12人
つまらない	2人

本の良さが凄く伝わってくる / さまざまな事柄が判った / おもしろそうだと思う…But、見る暇がない / 本の良さが凄く伝わってくる / インパクトが弱い / 次の時はみたい / 福島がどのようになっているか気になった / 原子力には興味があるのでまたやってもらいたいです / ホワイトボードがでかい / 展示の仕方が興味を持ちやすいように工夫されていたと思います / 原発事故がこの前起こったのでとても興味深かった / これからも続けてほしい / 原子力についての本がこんなにたくさんあることが知れて面白かった / 現在起こっている原子力の問題について理解を深めることができ、過去に起こった事故についても知ることができた / DVD まであって驚いた。沢山の原子力についての本が置いてあり、今現在の話なのでとても興味があるものだからとてもいいと思った / 前は控えめな場所で展示されていたが、今回は目立つ所にあって、やる気が出た

なお、プレゼントクイズの正解者の中から抽選で3名に図書カードをプレゼントしました。

## 編集後記

図書館だより第69号に寄稿してくださった皆様、お忙しい中ご協力いただきありがとうございました。

たくさん図書を寄贈していただきましたが、図書館では引き続き皆様からの寄贈図書、また購入希望図書も受け付けておりますので、今後ともよろしく願いいたします。

（図書館）



奈良工業高等専門学校 図書館

〒639-1080 大和郡山市矢田町22

TEL 0743-55-6015

URL <http://www.nara-k.ac.jp/library/>

リサイクル適性

この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。